

Title	中間構文の認知的分析
Author(s)	谷口, 一美
Citation	Osaka Literary Review. 33 P.1-P.16
Issue Date	1994-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25489">https://doi.org/10.18910/25489</a>
DOI	10.18910/25489
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 中間構文の認知的分析

谷口 一美

## 1. 序

- (1) a. This car drives easily.  
b. This book sells well.

上に挙げた例文は中間構文 (middle constructions) と呼ばれるものである。この構文は、能動文では目的語として表れる Patient (被動作主) を主語とし、また、(2) のパラフレイズから分かるように、総称的な Agent (動作主) の存在を含意しているようである。

- (2) a. This car drives easily.  
b. People, in general, can drive this car easily.

この構文には様々な特徴があるが、中でも、用いられる動詞は基本的に他動詞であるにも関わらず、すべての他動詞が適正に用いられるとは限らない点は特に興味深い。事実、共に売買行為の記述に関わる動詞である *sell* と *buy* であっても、中間構文としての容認度は対極的である。

- (3) a. This book sells well.  
b. \*This book buys well.

中間構文に関する先行研究も多数みられるが、Keyser & Roeper (1984) による統語的分析・Fagan (1992) の語彙的分析では、中間動詞を他動詞とみなすか否かに議論が限られているため、なぜ特定の他動詞のみが容認されるのかといった問題に対し解答は得られないままである。

一方、語用論的立場の分析として van Oosten (1986) は、「この構文は Agent が行為に関連せずかつ Patient が行為に対する責任 (responsibility) を持つ場合に用いられる」と説明している。中間構文の主語が、表現された行為に対する責任を負うということには直観的に同意できるが、果たしてこの「責任」の概念だけですべての事例を説明できるだろうか。(3) に挙げた *sell* と *buy* の違いに対し、van Oosten 自身、「売られるものは‘売る’という行為に責任をもつが、‘買う’という行為には責任を持つことがないからである」と述べているが、「責任」の観念が特に定義されていない以上、このような理由づけも説得力に欠ける。

このように、いずれの領域における分析も十分とは言えないことが分かる。中間構文を適正に記述しかつ様々な例の容認性を分析するために、本論では Langacker の「認知文法 (cognitive grammar)」の枠組みを採用する。認知文法において、節表現はすべてその発話者によって認識された事態 (event) を記述するものであるとみなされるが、中間構文もその例外ではない。以下、事態認知モデルの使用により、この構文の表す事態の特質を明らかにした上で、分析を試みたい。

## 2. 認知モデルと事態の他動性

ここでは、事態認識を理想化して表示する「認知モデル」として図1にある ‘action chain’ を提案する。これは、個々の物体がちょうどビリヤードの球のようにエネルギーを伝達し相互作用するとみなす、Langacker (1990) の「ビリヤードボール・モデル」を基盤とし、さらに Croft (1990) の事態構造、つまり事態は「使役 (CAUSE)・変化 (BECOME)・状態 (STATE)」の3つの分節から成立し、その中のどの部分を切り取るかによってそれを表す動詞の型 (causative, inchoative, stative) も決定されるという概念を付加したものである。

図1で、最も左側の参与者 (Agent) から延びた二重矢印は、それがエネルギーの伝達であることを示し、そのエネルギーの受け手である参与者から

延びた一重の矢印は、非エネルギー的な、状態や位置の推移を示しており、それ故この参加者は ‘Mover’ と呼ばれることになる。また、最も右側にある囲みは、Mover が Agent からエネルギーを受けた結果最終的にある状態に到達したことを表す。

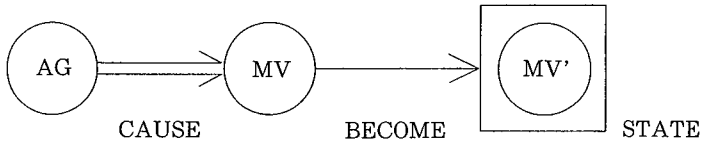


図1 Action Chain

(Normal Transitive Chain: NTC)

この図が表しているのは、最も典型的な他動的事態である。よって、動詞 *open*, *destroy* などの表す行為は図1の action chain に適合するが、すべての他動詞がこのような action chain で表示できるとは限らない。例えば他動詞 *resemble* などは、エネルギー的な作用が全く関与せず、明らかに表示は不可能である。一方、動詞 *scare* など、心理的経験を述べるものでも、メタファー的にエネルギー的解釈を行うことが容易であるので、図1の action chain でも表示可能である。そこで図1の action chain を、最も典型的な他動節を表示するものとみなし、以下これを ‘Normal Transitive Chain (NTC)’ と参照して他動性の基準としたい。

### 3. 中間構文の action chain : Langacker (1990)

前節で導入した action chain を用いると、中間構文の表す事態はどのようなものになるだろうか。Langacker (1990) は、(4) のような他動詞文・能格動詞文・中間構文の比較のため、各々を図2 (a)-(c) で表示している。

- (4) a. Andrea opened the door.  
 b. The door opened (all by itself).  
 c. The door opened only with great difficulty.

(4a) の他動詞文は、action chain の3つの分節すべてから成る事態であり、その中でも主語となる Agent (AG) が最も認知的に際立つ参与者として選ばれている。(4b) の能格動詞文では、Agent の存在がなく右側の2つの分節のみが選ばれ、Mover (MV) である *the door* が最も際立っている。(4c) の中間構文は (4b) と同様 Mover に最大の際立ちを与えているが、Agent を際立たせずしかもその表現のスコープに含んでいるという点で (4b) とは異なっている。また、Langacker は中間構文に関し「その主語である参与者が一種のエネルギーを発して Agent からの力に抵抗するか、またはその力を助長している」とみなし、図の Mover の中にエネルギーを表す二重矢印が加えられている。

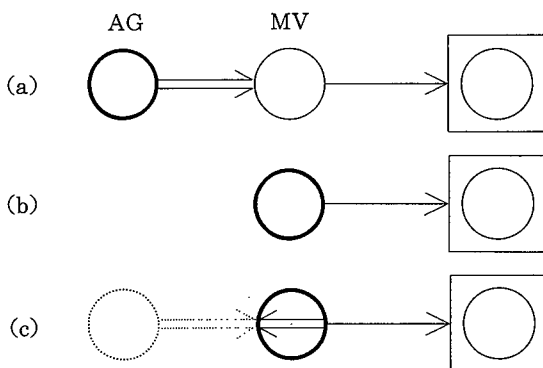


図 2

Langacker による記述は的確だが、中間構文の特性を表示するには図 2 (c) の action chain もまだ不十分である。以下で詳細な点を議論していきたい。

### 3.1 Agent の不特定性と Mover のエネルギー

例文(2)に挙げたように、中間構文では不特定の Agent の存在が含意されている。この不特定性は、figure/ground の知覚分化という、心理学的

要因によるものであると考えられる。我々の知覚は常に一様に起こるのではなく、ある特定のものに注意が集められる。この注意の焦点が figure であり、逆に注意の周縁部となる部分が ground である。一般に、エネルギー的運動を行うものは静止するものより、また特定の具体的なものは抽象的なものよりも figure になり易いと言える。

中間構文が図 2 (c) に表される事態認知を基盤としているならば、この構文は Mover が常に figure となることを要求する。しかし、もし Mover・Agent 共に特定の個体であるならば、action chain の 'head' に位置しエネルギー的に上位にある Agent が優先的に figure となる。これを回避するには、Mover は「特定性」という点で Agent に勝るしかないのである。つまり Agent は、不特定となることで ground に後退し Mover を figure として際立たせる機能を果たしているのである。

次に考察するのは、Mover がある種のエネルギーを発しているとの観察であるが、これは下の例文にある表現にも示されるようである。

(5) This book became the best *seller* last year.

接尾辞 -er は動詞と結合し、その動詞の動作主を表す名詞を作る (swimmer, runner など)。しかし、(5) にある *the best seller* の指すものは明らかに売られるものである「本」であり売り手ではない。この場合の *seller* は、中間構文 'This book sells well' にある *sell* に -er が付けられ、主語となる「本」を指しているのである。このように -er の接辞が可能であることから、中間構文の主語である Mover はある程度 Agent 的性質をもち、エネルギーを発する参与者とみなされることが確かめられる。<sup>1)</sup>

しかし、Mover の発するエネルギーが Agent 同様物理的なものであるとは考えにくい。そこで、Mover の「特質 (property)」が何らかの非物理的な内的エネルギーを発しているものとして、その構造を図 3 に示す。

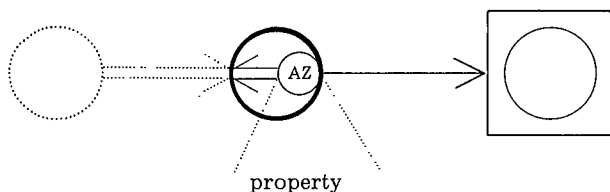


図 3

ここでは Mover の持つ特質が事実上活性領域 (active zone: AZ) となり、Agent からの力に抵抗或いは助長するような相対的エネルギーを発するという関係が表示されている。<sup>2)</sup> この「特質」という、抽象的な内的領域が活性領域となっていることは、他言語の中間構文から裏付けされる。次のフランス語の中間構文を参照されたい。

- (6) Ce roman se lit facilement.  
 (this book REFL reads easily)

ロマンス言語では、中間構文に reflexive clitic (フランス語では *se*) が生じる。この reflexive clitic が、主語に表れる参与者自身、あるいはそれに包括される存在物を指しているのであるとすれば、(6)の reflexive clitic はまさに図 3 での活性領域を記号化したものとみなされる。英語は reflexive clitic という体系を持たないため、この活性領域が言語化されないに過ぎないのである。

### 3.2 中間構文の副詞

副詞がほぼ義務的に生じることも、この構文の特徴のひとつであるが、Fellbaum (1986) も指摘するように、中間構文に用いられる副詞は大きく 2つのタイプに分類される。<sup>3)</sup> 一方は (7) にみられる「難易度の副詞」で、*easily* が代表的だが、*smoothly* なども行為の難易度を特定の異なる側面から記述するものとみなされるので、この範疇に入れられる。他方は (8) に

ある「達成度の副詞」で、*well* などが挙げられる。

- (7) a. This car drives *easily*.
- b. This car handles *smoothly*.
- c. This tent puts up *quickly*.
- (8) a. This book sells *well*.
- b. She photographs *beautifully*.

認知文法において、副詞の機能は「action chain にある尺度 (scale) をセッティングとして与える」ことであるので、中間構文の action chain は図4のように、難易度または達成度に関する尺度を与えられることになる。図では Mover が Agent からの力を助長するよう作用するため action chain が尺度の正極に対応することを示しているが、逆に Agent からの力に抵抗するのであれば尺度の負極に対応することになる。

厳密に言えば、難易度と達成度の尺度では、行為を表す action chain の対応部分が異なる。難易度の副詞は、ある行為の始まりから終わりまでを修飾の対象とするのに対し、達成度の副詞の場合、行為がどれだけ達成されたかを評価するには、その行為の全体というよりはむしろ「結果」としての最終的な状態のみが必要とされるからである。<sup>4)</sup> 達成度の副詞では、図の (b) にあるように、action chain の3つの分節のうち STATE の分節のみが尺度上の正極（あるいは負極）に対応することになる。

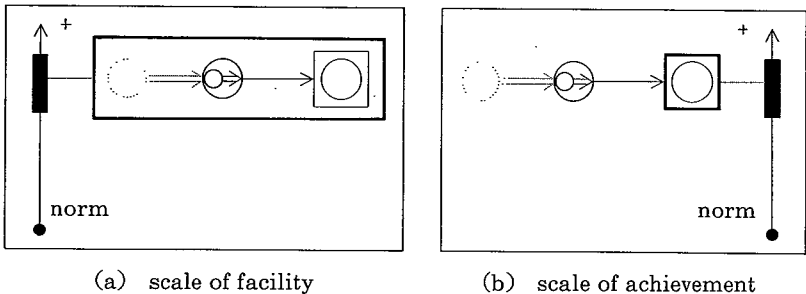


図4



中間構文が記述する事態を示す認知モデルの精密化を行ってきたが、次節では、このモデルに基づいた分析に入りたい。

#### 4. 分析

これまでに述べたように、中間構文はまず Mover という参加者を必要とし、さらに不特定の動詞に際立たないながらも Agent の存在をスコープに含む。つまり Agent と Mover という2つの参加者を要求するということから、(9) のように想定することができる。

- (9) 中間構文は、Agent から Mover へ向かうエネルギーの流れを含む action chain、すなわち典型的な他動的事態を表す NTC (図1) を前提とする。

この想定に依った場合、NTC の表示に適合しない行為あるいは事態を記述する動詞は当然中間構文として用いられないと予測される。以下、具体的に例を検証していく。

##### 4.1 sell/buy

- (10) a. This book sells well.  
b. \*This book buys well.

(10a) のように動詞 *sell* を用いた中間構文は完全に容認される。その一方、同じように売買行為を表す動詞 *buy* を用いると、(10b) が示すように中間構文としては成立しない。「売る」行為と「買う」行為はいわばコインの表裏をなすように思われるが、なぜこのような差が生じるのだろうか。そこで、*sell* と *buy* の各々がどのような事態を記述するかを、action chain によって表示してみたい。

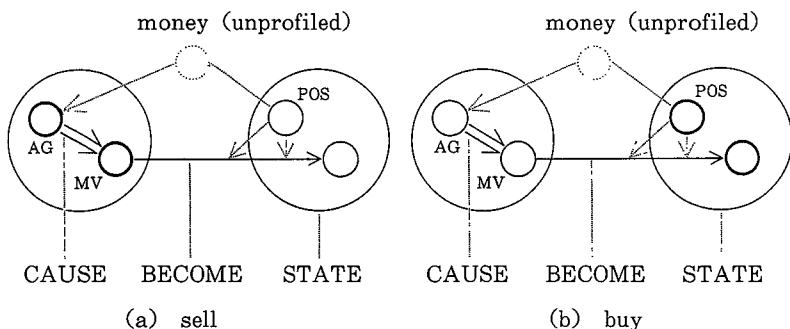


図5

図5(a)は *sell*、(b)は *buy* の概念的意味構造を示したものである。両者とも、売り手 (Agent: AG) が売買の対象物 (Mover: MV) にエネルギー的にはたらきかけ、買い手 (Possessor: POS) の所有領域へと移動させるという chain をベースとしているが、何を最も認知的に際立たせるかという figure/ground の点で違いが見られる。*sell* の場合、Agent が最も卓立した参与者として選ばれ、従って文法関係では他動節の「主語」に対応するのがプロトタイプである。このように action chain の 'head' にあたる参与者 (Agent が典型的) が最も際立つのが無標の選択である。<sup>5)</sup> それに対し、*buy* では Agent が実質上スコープから外れ、action chain の 'tail' に位置する参与者である Possessor に最大の際立ちが与えられているという点で、特殊な選択を行っていることが分かる。このような *buy* の構造は、Agent から Mover へのエネルギーの流れを含む NTC の構造、つまり中間構文の前提からは明らかに逸脱している。そのため (10b) のように、*buy* を用いた中間構文が容認されないと推測することができる。

*buy* と同様、受容者を最も際立たせる構造をもつ動詞を用いた中間構文はやはり容認されない。

- (11) a. \*Flowers receive with pleasure.  
 b. \*Those titles inherit in France.

さらに付け加えれば、(10b) が容認されない理由は他にも存在すると考えられる。それは *buy* と副詞 *well* との結合である。*well* は中間構文に生じる典型的な副詞であり、かつ「達成度」を表すものである。前述の議論に従えば、「達成度」の場合その評価は行為の「結果」から得られるので、尺度上に対応するのは *action chain* の中でも *STATE* の分節である。

しかし、図 5 (b) をもう一度見てみると、*buy* が指定しているのは、ベースとなっている *action chain* 全体における *STATE* の分節のみに相当し、*buy* 自体は *CAUSE-BECOME-STATE* という典型的な三分節をなしていないことになる。従って *buy* では副詞 *well* の与える尺度上に対応すべき *STATE* の分節が欠如しており、(10b) にある ‘*buy well*’ という結合もあり得なくなる。

では、副詞が「難易度」を示すものであればどうだろうか。

- (12) The low mortgage on those houses means that *they buy easily*.  
(O’Grady (1980) : my emphasis)

*buy* の指定する構造の中で、Possessor から Mover への作用（図では点線矢印で表記）に特に注目し、Possessor を Agent に近い参与者とみなせば、*buy* も *NTC* に近い構造をもつことになる。このような特別な操作を行った上で、しかも結合する副詞が行為全体を修飾する「難易度」のタイプであれば、稀ではあるが中間構文として容認されるのである。

以上から、(10b) は次の 2 点において不適格であるといえる。

- (i) *buy* が指定する構造において、認知的際立ちの選択が特殊であるため、中間構文の前提となる *NTC* を満たさない。
- (ii) *buy* 自体が *STATE* の分節を欠いているため、達成度の副詞 *well* との結合は認可されない。

一方、(12) は (ii) に抵触せず、さらに (i) についても特定の操作を施し *buy* の構造を *NTC* に近づければ違反にならないため、中間構文として成立する。ただし後者については、特定の操作を行う分認知的なコストが高い

ため、たとえ *buy* を中間構文に用いることは可能でも、依然成立は困難であるといえる。

#### 4.2 知覚動詞

人間の知覚経験を表す動詞は、一般に中間構文に使用されない。

(13) a. \*The mountain sees clearly from a distance.

b. \*The loud noise hears easily in a crowd.

これらの知覚経験において、経験者 (Experiencer) はその知覚対象物 (Experiencée) にいかなる変化をももたらさない。よって、図6に示される通り、知覚経験に関する動詞は NTC を満たさず、従って中間構文にも用いられないのである。

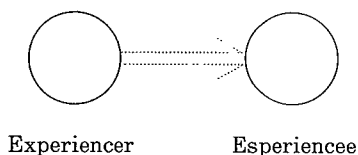


図6

#### 4.3 表面接触型動詞

*hit*, *hammer* など、対象物への表面的接触を記述する動詞も中間構文とならない。

(14) a. \*This ball hits easily.

b. \*This metal hammers easily.

これらの動詞の表す行為において焦点となるのは、対象物の表面へのはたらきかけであり、その結果対象物に変化がもたらされるか否かはスコープの外である。図7にあるように、これらの行為を表すaction chain は STATE

の分節を欠き明らかに NTC を満たさない。

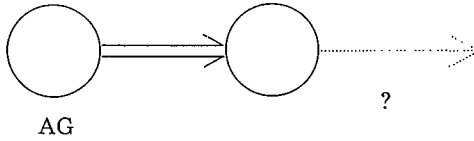


図 7

一方、これらの動詞に二次述語を加えた結果構文 (resultatives) は、中間構文として用いることができる。

(15) This metal hammers flat easily.

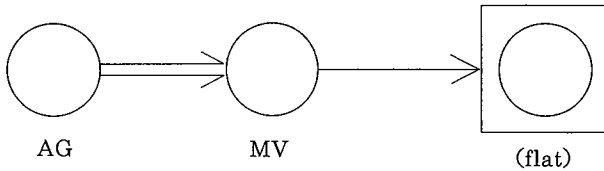


図 8

このとき、付加された述語 *flat* は図 7 で不足していた STATE の分節を補う形となり、図 8 のようにちょうど NTC に適合する。よって中間構文の前提を満たし、(15) の表現が成立するのである。

#### 4.4 創造／破壊に関する動詞

創造行為に関する動詞も一般に中間構文に用いられない。

- (16) a. \*Wool sweaters knit easily.  
 b. \*Those cabinets build easily.

これらを action chain で表示したものが図 9 である。(16) の各々の表現の主語にあたるものは、創造行為の結果として生じるものであるので、

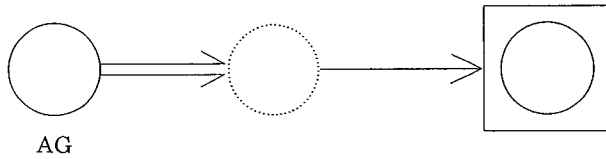


図9

STATE の分節ではじめて具現化されることになり、最初から既に存在するものではない。よって、chain の中間にあるべき参与者 (Mover) は空となり、NTC の概略図からは逸脱する。

同じように創造を表す動詞でも、次のようなものの場合、作り手である Agent が最初にはたらきかけるのは (16) のように「原材料」といったやや漠然としたものではなく、「部品」という形ですでに存在していると考えられる。

- (17) a. Those toys assemble easily.
- b. This film will develop in twenty minutes.

このとき、図9で空となっていた参与者は具現可能とみなされ、NTC に適合するため、中間構文としても容認される。

逆に破壊行為を表す動詞はどうだろうか。次の例を一見すると、中間構文にはならないように思われる。

- (18) \*This cathedral destroys easily.

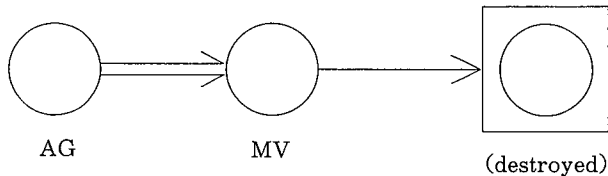


図10

動詞 *destroy* は、図10に示す通り NTC を完全に満たしている。にも関わらず (18) の中間構文が容認されないのは、NTC とは別次元の理由によると考えられる。(18) の表現によって伝達されるのは、「この大聖堂は簡単に壊れる」という断定であるが、「簡単に壊れる」か否かは実際にその建物を壊してみないと分からないので、現に立っている建物に対し (18) のような断定を行うことは不可能である。

そこで次例を参照されたい。

(19) This cathedral *will destroy* easily.

現実に「簡単に壊れる」ことを判断できなくとも、それを推量することは十分可能であるので (19) は容認される。よって、*destroy* という動詞自体は基本的に NTC の前提を満たし中間構文に用いられるが、認知的にみた「妥当性」という点で (18) は不適切な表現となっているのである。

#### 4.5 4 節の結論

以上の分析から、中間構文は図1にある NTC を基盤としているという (9) の想定は適正であるように思われる。中間構文の成立は我々の事態解釈に関わっており、それが基本的に NTC を満たす場合に限り中間構文が用いられるといえる。例えば *buy* にしても、それが必ずしも中間構文にならないのではなく、認知モデルに適合するように解釈されれば不可能ではない。中間動詞となるか否かが辞書 (lexicon) で既に決定されているという、いわゆる自律的文法理論の見方よりも、事実に対応した説明力をもつとも思われる。

但し、この NTC はある動詞が中間構文に用いられるためにまず満足しなければならない条件であり、仮にその条件が満たされても、先に見た *destroy* の例のように、また別のレベルで不適合となる場合もある。次のような例も参照されたい。

- (20) a. This metal recycles.  
 b. \*This shirt buttons.

動詞の表す行為自体がある尺度上で特別の位置を占めるため、副詞が必要とされないものとして (20a) などが挙げられる (リサイクルできる、ということ自体が「リサイクル可能性」というような尺度上で高い位置を占める)。しかし、(20b) の場合、「服のボタンが留まる」ということは日常においてごく当然のことである。認知モデルの要件・認知的妥当性共に満たしていても、発話として情報価値のないものは排除せざるを得ないのである。

## 5. 結語

認知モデルの使用により、中間構文の特徴が明示されると共に、個々の例文の容認性の予測が行えることが示されたと思う。より幅広く捉えれば、ある状況を言語によって表現しようとする際の構文の選択は我々の事態認知のあり方に依拠していると述べられるのではないだろうか。我々言語使用者の認知的要因という、これまでの文法理論で考慮されなかった側面が、実際には文法に不可欠なものであることも同時に導かれるであろう。

この小論で取り扱ったのは英語における中間構文であり、最終的に得られた NTC の条件はあくまで英語独自のものであると考えられる。今後は他言語の中間構文との比較により、各言語における事態認識の傾向の違いが捉えられるよう試みたい。

## 注

- 1) *-er* を付加して中間構文の主語を指せるのは、この *sell* の場合に限られるが、これは *sell* という動詞自体、中間構文の用法が慣例化しているため、他の動詞以上に形態的变化を許容するものと考えられる。関連した議論が Croft (1991) に見られる。
- 2) 'active zone' に関しては Langacker (1987) 参照。
- 3) (i) に示すように特定の個人の様態を表す副詞は排除されるが、これは前に



述べた Agent の不特定性に起因する。

(i) \*This car drives {carefully / skillfully}.

- 4) 例えば本がよく売れたかどうかは「本の売上げチャート」のような「結果」から判断され、ある人の写真うつりがよいかどうかは写真を撮るという行為の結果である写真から判断される。
- 5) 認知的際立ちと文法関係については、Langacker (1990) 参照。

### 主要参考文献

- Croft, William (1990) "Possible Verbs and the Structure of Events," in Tsohatzidis (ed.), 48-73.
- Croft, William (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*, University of Chicago Press, Chicago.
- Fagan, Sarah M.B. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions: A Study with Special Reference to German*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fellbaum, Christiane (1986) "On the Middle Construction in English," Indiana University Linguistics Club, Bloomington.
- Keyser, Sammuell Jay and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* vol. 1: *Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (1990) "Settings, Participants, and Grammatical Relations," in Tsohatzidis (ed.), 213-238.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar* vol. 2: *Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- O'Grady, William D. (1980) "The Derived Intransitive Construction in English," *Lingua* 52, 57-72.
- Oosten, Jeanne van (1986) *The Nature of Subjects, Topics and Agents: A Cognitive Explanation*, Indiana University Linguistics Club, Bloomington.
- Taniguchi, Kazumi (1994) "A Cognitive Approach to the Middle Construction in English," *English Linguistics* vol. 11, Kaitakusha.
- Tsohatzidis, Savas L. (ed.) (1990) *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, Routledge, London.